

# 読みの目標が読解過程に与える影響

—上級日本語学習者のケーススタディー—

封静宜（名古屋大学）

## 要 旨

本研究は伝達目標と批判目標を上級日本語学習者に課し、その読解過程が目標によってどう異なるのかを読解前、読解中、読解後に分け検証した。その結果、「批判目標」はモニタリングが多く行われ、文章の正しさを考えながら読むという先行研究の結果と一致した結果が示された。どちらの目標でも文や段落の重要度の判断は一致しているが、重要と判断した箇所に対する行動には差が見られた。「伝達目標」では筆者の主張を理解するという行動が中心となっているが、「批判目標」では、反論するために、主張、論拠を注意深く読み、キーワードの意味を明確にする行動が促進されるという新たな知見が得られた。

【キーワード】：読みの目標 読解過程 プロトコル分析 伝達目標 批判目標

## 1. はじめに

我々が文章を読む際、日常生活でもアカデミックな状況でも、何らかの目標を持って文章を読み進める。同じ文章であっても目標が異なればその読解過程が異なる（大河内 2001）。では、具体的に目標の差によって読解過程はどのように異なるのであろうか。本研究では「読解内容を他者に伝達するという目標（以下、伝達目標）」と「読んだ内容を批判するという目標（以下、批判目標）」を日本語を第二言語として学習している読み手に課し、その読解過程が目標によってどう異なるのかを検証する。

## 2. 理論付けと先行研究

稲垣・鈴木・亀田（2002）は、認知を、外界から与えられる情報に従って、その都度適切な行動を選択している働きであるとしている。本研究では読解過程を認知の一種類であると考え、読解過程を目標を達成するために選択された行動の連鎖であると定義する。この読解過程は理解と予測・推測といった認知過程と、それを客体化して評価するメタ認知過程から成り立っている（内田 1982）。さらにメタ認知過程は、認知についての予想・点検・評価などのメタ認知的モニタリングと認知についての目標設定・計画・修正などのメタ認知的コントロールに細分化される（三宮 2008）。メタ認知は読解の事前段階、遂行段階、事後段階においても働く。事前段階では課題の評価に基づいて目標を設定し方略を選択する。遂行段階では目標と課題達成との間のズレを

認識し目標や方略の修正を行う。事後段階では課題達成度の評価に基づき、次回に向けて目標の再設定、方略の再選択を行う。本研究においてもこの段階の分類に基づき読解前、読解中、読解後の各段階で、読みの目標を達成するためにどのような行動が選択されるかを検証する。

古本(2006)と柏崎(2010)は、それぞれ小中学校の教科書に掲載されている評論文と説明文を題材として日本語を母語とする大学(院)生に伝達目標を課し、伝達する相手が小学生か大学生か異なることによって理解度と産出文章にどのような影響が表れるかを検討している。その結果、伝える相手が異なっても理解度に有意な差は観察されなかったが、産出文章の分析結果から、伝達する相手が小学生の場合、相手が興味・関心を抱けるように注意を向け、加えて形式面にも注意が及ぶという結果が示されている。

また、大河内(2001)は大学講義レベルの認知心理学に関する説明文を題材として日本語を母語とする大学生に伝達目標と批判目標を課し、読解の目標の差が読解過程にどのような影響を与えるかについて検討している。その結果、伝達目標を課した伝達群では文章中の言葉の意味や、複数の言葉の意味の違いについて情報を求める傾向があり、文や文章全体より個々の単語に反応していること、そして、文章の組み立てやつながりを考えながら読んでいることが明らかになった。一方、批判目標を課した批判群では単語に注目することが相対的に少なくその代わりに文章中の動作主の行為を理解するだけでなく、その行為の背景にある動機を検討するような深い疑問を生成したことが多いこと、そして、書いてあることが正しいかどうか考えながら読み進めていることがわかった。

一方、日本語学習者を対象とした研究としては白石(1999)が、再話という条件の有無が理解度と記憶に及ぼす効果について検討している。その結果、再話条件は上級の学習者の理解の促進に効果が見られるが、中級および母語話者にはその効果が見られないという結果を示している。

このように先行研究においては読みの目標の差が日本語母語話者や上級日本語学習者の読解過程、理解に影響を与えることが指摘されている。しかし、具体的に「行動の連鎖」としてどのような差が現れるのか、またなぜその差が生じるのかについてはさらなる検証が求められる。そこで、本研究では上級日本語学習者に「伝達目標」と「批判目標」を課し、その読解過程が目標によってどう異なるのかを読解前、読解中、読解後に分け質的に検証することとする。

### 3. 実験方法

#### 3.1. 実験用文章

実験用文章は、金田一秀穂(2007)の「大切なのは『美しさ』よりも『正しさ』」を用いた。1文の平均長は26.62(692字/26文)で、漢字含有率は24.57%(170字/692字)

である。帯2 (obi-2.x)<sup>1)</sup> とリーディングチュウ太<sup>2)</sup> を利用し素材の難易度を測定した結果、この文章は中級前半レベルであると判断された。なお、語彙知識の差による影響を最小限にするために単語リストも添付した。実験用文章は下の囲みの通りである。◁は段落を示す。

この文章は二つの対立概念を比較し主張を述べる文章構成と内容となっている。本研究では「AよりもB」という対比的なタイトルがどのような予測を生み出すか、<1>の事例、<2>~<4>の実態と<5>以降の主張の位置づけ、そして「国語力」「コミュニケーション能力」「言語能力」などのキーワードを読み手がどのような手がかりを用いて理解しているかに焦点を当て分析を進める。

大切なのは「美しさ」よりも「正しさ」

<1>「ピーカーに蒸留水を何CC入れました。そこに粉末状の何々という薬剤を加えました。アルコールランプで熱して、何度になるまで攪拌しつづけました」

<2>こうした「事実と論理」のみで構成されたような文章は、あまり国語の授業では扱われません。でも、言語能力を磨いていくには、これが重要なんです。

<3>たとえば、小学生に作文を書かせてみると、みんな「印象」ばかりを書いてしまうんですよ。「今日は遠足に行きました。お花がきれいでした。とっても気持ちよかったです」といった感じですね。これは中高生になっても同じで、いわゆる国語というものがあまりにも情緒的になりすぎているところがあります。

<4>つまり、美しい文章や感受性豊かな文章を書けることが、国語力の証のようになっている。ベタベタした、甘ったるい文章が「美文」と思われるようになっている。でも、言葉にとって大切なのは、見た目の美しさではありません。何よりも先に「正しさ」なのです。

<5>美しさや情緒なんて、しょせんはご飯のふりかけみたいなもので、ベースとなるのは正確無比な文章なんです。「今日は遠足に行きました。お花がきれいでした。とっても気持ちよかったです」という先の文章の場合だと、「今日」とは何月何日なのか。「遠足」はどこに行ったのか。誰と、どのようにして行ったのか。「お花」はどんな花なのか。大きさは、色は、香りはどうだったのか。そしてなにが「気持ちよかった」のか、といった肝心な部分が抜け落ちています。

<6>だからコミュニケーション能力ではない、もう少しピュアな言語能力を磨くためのトレーニングというものを、もっとやっていいんだろうと思いますね。

<7>とにかく情緒を切り捨てること。事実と論理だけで文章を組み立てていくこと。それこそが、ほんとうの国語力を高めていくポイントなのかもしれません。

金田一秀穂 (2007) 『16歳の教科書』 講談社、pp. 23-25より

### 3. 2. 読みの目標設定

本研究は以下の課題により、具体的な読みの目標を設定することにする。

- ① 伝達目標の課題:日本語の作文の授業で、「いい作文とは」について、皆で話しあう。先生は「いい作文とは」についての文章を1つ探し、それについて一分間で、皆（中級レベルの留学生）の前で発表するという宿題を出した。あなたは「大切なのは『美しさ』よりも『正しさ』」を選んだ。皆の前で発表するとしたら、どの情報をどのように伝えるかを考えながら読んで見て、発表原稿を完成しなさい。
- ② 批判目標の課題:日本語の会話の授業で、ディベートを練習する。皆は「大切なのは『美しさ』よりも『正しさ』」という文章について、皆（中級レベルの留学生）の前で筆者の意見に対して一分間の反論をしなければならない。反論するとしたら、どの情報をどのように自分の反対の理由と根拠を示すかを考えながら読んで、発表原稿を完成しなさい。

### 3. 3. 参加者

参加者2名は中国語母語話者で、2名とも2010年に日本語能力試験1級に合格している。本研究が行った読解レベルテストの結果<sup>3)</sup>、2人とも14点満点であった。この結果から2名の参加者は同等の日本語能力、読解能力を持つと判断した。このうち1名（以下Dと表す）に「伝達目標」を課し、もう1名（以下Hと表す）に「批判目標」を課した。

### 3. 4. 資料収集方法

本研究では、読解過程における発話思考法、読解終了後の再生刺激法と事後インタビューにより分析資料を収集した。読解過程は可視化できないため、発話思考法がよく使われる。しかし、複雑な行動や記憶容量を超える場合には、報告が難しいという難点がある。その制限を考慮し、読解過程をビデオ録画するとともに、読解後の再生刺激法と事後インタビューを併用し、発話思考で観察されないデータを収集した。発話はすべて母語で資料を収集した。以上のデータを全て文字化して日本語に翻訳した。

実験の手続きは以下の通りである。まず(1)実験の目的および流れの説明を行った上で、(2)1時間前後の発話思考法の練習を行った。練習用文章は、実験テストと同じシリーズの文章を選んだ。練習後(3)中国語訳付きの課題文を示し研究者がそれを読み上げた。(4)実験用文章、単語リスト、課題を参加者の手元に置き発話思考法を行いながら課題遂行の実験を開始した。制限時間、ノート取り、書き込み、印をつけること等の進め方は参加者に一任した。(5)最後に作文を産出する。作文産出過

程においても発話思考法を継続した。(3) から (5) まではビデオ録画した。

読解と作文が終了した時点で5分間の休憩を取った後(6) 読解テストを行った。(6) 終了後、(4) (5) の画面を見ながら、その課題遂行過程における考えを確認するため(7) 再生刺激法によるインタビュー、さらに(8) 事後インタビューを実施した。(7) (8) の内容はICレコーダーにより録音した。

### 3. 5. 分析方法

本研究では発話思考法による資料をプロトコルと呼ぶ。プロトコルをビデオ録画、再生刺激法と事後インタビューによる資料も参照しながら認知的な行動単位に分割した。さらに、すべての分割単位に表1の行動を付与した。

表1 読解における行動範疇

メ タ 認 知	モニタリング	評価	①感想②意見
		点検	①訂正②問いかけ③焦点化④検証
	コントロール	調整	①方略選択
		計画	①目標設定②計画立案
認 知	①理解 ②予測・推測	読み	
		意味の明確化	①翻訳②言い換え③照応関係の指摘
		要点の把握	①要約②キーワードの拾い読み
		背景知識や 経験の利用	①内容の知識の利用②個人の経験との照合③内容のイメージ化④具体例の活用⑤文化的知識の利用⑥文章構造の知識の利用
		言語知識の利用	①語彙知識の利用②文法知識の利用 ③文、節構造の分析④中国語の漢字知識の利用
		リソースの利用	①単語表参照②指示文の参照③タイトルの利用

## 4. 分析結果

以下の表はDとHのプロトコルの抜粋である。引用部は紙幅の都合もあり、フィラー、繰り返しは削除している。また「～」は読み部分の中略を示す。通し番号は認知行動の生起順に付与した。“ ”は原文、課題の音読、引用の部分である。イタリックは参加者の原文、課題の引用以外の日本語による発話を示す。なお【】はプロトコルから直接観察できる認知行動を示す。

### 4. 1. 読解前

まず調査者がDに課題を音読しながら示した。その後Dは、課題を読み返さず直接文章の読みに入っている。この段階においては【目標設定】や【計画立案】というメタ認知的なコントロールは観察されなかった。Dは事後インタビューで普段の読み方

を「知らない単語に遭遇したら単語表をチェックする。そして、文章を一通り読んでから課題を見る。課題を確認してからまた文章を読み直す」と説明している。そして、今回の課題を大意を読み取るための「簡単な抜粋」だと理解し「いつもの、一番慣れた読み方」をしたと述べている。このコメントから、Dにとっては【目標設定】や【計画立案】というメタ認知的なコントロールは意識的に行わなくても行える自動化された過程であるとも推測される。

一方、Hは調査者が課題を音読しながら示した後、表2のように課題を読み返している。Hは課題を読み返す段階で、まず「正しさのほうがいい(2)」と要点把握をし「この文章のよくないところを見つけ出す(5)」と目標を点検している。しかし「まだ分からない(7)」と【感想】を付け加え、日本語の課題を読むという【方略選択】をしている。その上で「この文章の不都合なところを見つけ出して、自分の意見を述べるんだらう(10)」と【目標設定】をしている。最後に「まず(本文を)見よう(14)」と【方略選択】をし、読解を始めている。Hは事後インタビューで普段の読み方を「読解の問題がないなら直接文章の読みに入る」と説明しているが、今回の課題では「作者の話について反論する気持ちで読むんだ」と述べている。これらの結果から「批判課題」がHの普段の読みとは異なる課題の読み返しを促したと考えられる。

表2 読解前

Hのプロトコル			
1	読み		“日本語の会話の授業で～『大切なのは「美しさ」よりも「正しさ』”
2	要点の把握	要約	“正しさ”のほうがいい。
4	読み		“という文章に～提出する”
5	点検	問いかけ	この文章のよくないところを見つけ出す。間違いないだろうね。
6	読み		“一分間の反対意見を提出する。～発表原稿を完成してください”
7	評価	感想	まだよくわからないなあ。
8	調整	方略選択	日本語のも見てみよう。
9	読み		“日本語の会話の～自分の反対の理由と根拠 “
10	計画	目標設定	この文章の不都合なところを見つけ出して、自分の意見を述べるんだらう。
14	調整	方略選択	まず見よう。

## 4. 2. 読解中

### 4. 2. 1. タイトルからの予測・推測

Dは事後インタビューで「タイトルは（中略）文章を書くとき、正しさは美しさより大切だと言っている」と述べているように、まずタイトルを見て「文章は大切なのは正しさ」と内容を予測している。Hも事前段階で「正しさ」が重要であると認識し、その重要性を際立たせるため「正しさ」に囲みを付け際立たせている。そしてタイトル読みの段階では「大切なのは美しさじゃなく正確さだ」と予測し、全体的な文章の方向性を予測した上で文章の読みに取りかかっていることが分かった。

### 4. 2. 2. 文や段落の文章内での位置づけの把握

表3 文章内での位置づけの把握

Dのプロトコル			
23	読み		“でも、～美しさではありません。”
25	意味の 明確化	翻訳	しかし、言語にとって最も大切なのは、…このような甘ったるい、…このような言語、このような文章じゃないと作者は思う。
27	読み		“なに、なによりも、先に正しさなのです。”
29	意味の 明確化	翻訳	意味はね、正しさを第一にするという。
45	要点の 把握	要約	この段落の意味はこうだ。…文章は二部からなっている。基本的には、本体は正確な文章。この基礎の上に、修飾が情緒的な表現を加える。文章を…より美しくさせる。作者はご飯とおかずでたとえている。
57	読み		“本当の国語力を高めていくほんとうのポイントかもしれません”
58	要点の 把握	要約	上の2文からは自分の国語レベルを高めるポイントだ。作者はこう思っている。

表3からDは【読み】(23)を行い「言語にとって最も大切なのは…甘ったるい…文章じゃないと作者は思う(25)」、「正しさを第一にするという(29)」と【翻訳】をしながら意味を明確にし、「段落の意味はこうだ(45)」と要点を把握している。このように翻訳で文の意味を明確にするとともに、各段落の文章内での位置づけも明確にしていることがわかる。事後インタビューでも「段落1と段落2は前置きの働きに相当する。それから、続いて(段落3では)小学生、中学生、高校生の作文で、本当のメインの文章が始まる」と述べているように文章における段落の位置づけを明確に意識している。さらにDは段落4の「でも」に印を付け焦点化している。事後インタビューで印について「この記号(=でも)の前後の内容は転換するところを示す。『でも』の後は間違いなく作者の言いたい中心的な考えだ」と述べているように、接続詞

によって次の段落で述べられる主張も予測しながら読み進めている。最後の段落7の内容についても「作者はこう思っている (58)」と【要約】し、事後インタビューでは「文章をどう書くかを作者が示したいポイントだと思うから、重要だ」と説明しているように、文の意味だけではなく、それぞれの文、段落の文章内での位置づけも明確に意識している。

このような文章の位置づけを把握する読みはHでも同様に観察された。以上の結果から、上級レベルの読み手においては、目標とは関係なくタイトルを利用し、内容を予測・推測し、さらに【読み→翻訳→要約】を中心とした行動の連鎖により、文や段落の文章内における位置づけも把握していることがわかった。

#### 4. 2. 3. 目標が読解過程に与える影響

タイトルからの予測・推測、文や段落の文章内での位置づけの把握においては目標の差による読解過程の差は観察されなかったが、次の過程では行動の差が観察された。段落4の「つまり、美しい文章あるいは感受性豊かな文章を書けることが、国語力の証のようにになっている」という文でDは【翻訳】により理解を進めている。一方、表4に示すようにHは同じ箇所でも【翻訳】した後、「文章のタイトルは美しさよりも正しさが重要 (90)。だから、後の文には正しさの重要性を示すだろう (91)」とタイトルからの予測や文章構造の知識を利用して、続きには反対意見が来るという期待を示している。

また「でも、言葉にとって大切なのは、見た目の美しさではありません。何よりも先に『正しさ』なのです。」という箇所について、Dは表3に示すように各文を【翻訳】をしてから、「この段落の意味はこうだ。文章は二部からなっている。基本的には本体は正確な文章。この基礎の上に、修飾が情緒的な表現を加える (45)」と要点を【要約】をしている。このようにDは作者の主張は適切に理解しているが、その主張の論拠となっている「コミュニケーション能力」や「ピュアな言語能力」という語に注意を払っている様子はプロトコルでも事後インタビューでも観察されなかった。

一方、同じ箇所でもHは「だから前に書いたのは“美しい文章や感受性” (104)」と前の段落との【照応関係の指摘】をし、今までの美しさについての理解を整理してから、「続きを見る (105)」と「正しさ」について書かれている部分を探す【方略選択】をしている。さらに「しかし文章のテーマは、“美しさよりも正しさ”、正しさは美しさよりも重要 (108)」と作者の主張を確認してから「文章を読んで、反対意見を提出しよう (109)」と【目標設定】をしている。さらに「続きを見たら、この文に対していろいろ反論があるだろう (126)」と反対意見を計画しようとしているが、実際の【計画立案】には至っていない。しかし「反対意見を提出する」という【目標設定】によりDとは異なった行動連鎖が観察された。Hは段落6に進むと、「文章のタイトルは、“正しさ”はより重要。しかしこの“トレーニング”と“正しさ”とどんな関係が



あるのか (146)」、**「“トレーニング、言語能力、コミュニケーション”、この辺には矛盾はないかな (147)」**と【問いかけ】ている。これは「反対意見を提出する」という目標を意識しながら読み進めているため、作者の論拠が書かれている段落6でより深い検討をしているのだと推測される。そしてこの【問いかけ】の答えをさぐる過程で、小学生の作文の例について「客観的にことを見る？ そうでもない？ (163)」と【問いかけ】、なお確信が持てないために「事実と論理」を【焦点化】し、「これは、私はこう思っている、比較的客観的で論理的だ (169)」と主張について【意見】を述べている。しかし、なお確信が持てないようで、「このように、“正しさ”を重んじるのは、実は“美しさ”を入れてない。入れている？ 入れてない？ (170)」と再度【検証】を行っている。

しかし、依然として明確な答えは得られていない。そこで、「だから何をしたらいいかな、つまりコミュニケーション能力じゃなくて、“コミュニケーション能力ではない、もう少しピュアな言語能力を磨くためのトレーニングというもの”が大切…かな (172)」と段落7の論拠の合理性を点検している。

以上のように伝達目標では筆者の主張を理解するという行動が中心となっているが、批判目標では批判するために作者の主張の論拠を確認するために自分自身に問いかけ検証するという内省的な行動が促されていると考えられる。

表4 目標が読解過程に与える影響

Hのプロトコル			
89	意味の明確化	翻訳	つまり、このような美しい文章あるいは感受性豊かな文章を書くなら、国語力の、つまり、自身の国語力を証明したいなら、このような美しい文章や感受性を書く。
90	リソースの利用	タイトルの利用	ところが、文章のタイトルは「美しさ」よりも「正しさ」が重要。
91	背景知識や経験の利用	文章構造の知識の利用	だから、後の文には「正しさ」の重要性を示すだろう。それで例を挙げていった。
103	意味の明確化	翻訳	しかし、言語にとって大切でないのは、“見た目の美しさ”。目に見た美しさ、目に見た美しさではない。
104	意味の明確化	照応関係の指摘	だから前に書いたのは“美しい文章や感受性、感受性豊かな”。
105	調整	方略選択	続きを見る。
106	読み	読み	“何よりも先に正しさなのです。”
108	点検	焦点化	しかし文章のテーマは、“美しさよりも正しさ”、正しさは美しさよりも重要。
109	計画	目標設定	文章を読んで、反対意見を提出しよう。
126	背景知識や経験の利用	文章構造の知識の利用	だから、この後文は、この文に、続きを見たら、この文に対していろいろ反論があるだろう。
145	点検	焦点化	文章のタイトルは、“正しさ”はより重要で、
146	点検	問いかけ	しかしこの“トレーニング”と“正しさ”とどんな関係があるのか。
147	点検	問いかけ	“トレーニング、言語能力、コミュニケーション”、この辺には矛盾はないかな。
163	点検	問いかけ	だからね、客観的にことを見る？そうでもない。
166	点検	焦点化	つまり国語能力を磨く、国語能力を磨くなら、必要情緒を捨ててしまって、事実と論理のみの文章を書くのが必要だ。
169	評価	意見	だから、この文章のこのあたりの論証を考えている。これはね、私はこう思っている、比較的に客観的で論理的だ。
170	点検	検証	が、このように、“正しさ”を重んじるのは、実は、“美しさ”を、えっ？入れてない。入れている？入れてない？
172	点検	問いかけ	だから何をしたらいいかな、つまりコミュニケーション能力じゃなくて、“コミュニケーション能力ではない、もう少しピュアな言語能力を磨くためのトレーニングというもの”が大切…かな。

#### 4. 2. 4. 作文遂行前の読み

表5 作文遂行前の読み

Dのプロトコル			
60	調整	方略選択	指示に戻ろう。
61	計画	目標設定	一分間の報告をする。テーマは“いい作文とは”。
63	点検	焦点化	作者が言いたいのは、最後のこの2つの段。そして19と30の2行。
64	計画	計画立案	前のこの例は見なくていい。前の3行を切ってしまうおう。これは、簡単な説明、要らない。
Hのプロトコル			
174	計画	方略選択	だから思う…もう一回課題を見よう。
176	点検	問いかけ	文章を読んで、文章中のどんな内容に注意するか。
177	計画	目標設定	だから、私はこの文章を読むなら、美しさのほうが重要だと思う。
181	点検	焦点化	この後半にも“言語能力を磨く”とあり、国語の授業ではこのような感受性の深い文章を書くのではなく、このような客観的な、事実と論理を述べる文章を書くべきだと作者は思っている。後者のほうで自分の国語能力が磨かれるわけだ。
182	計画	計画立案	だから私は国語能力を磨くなら、美しさのほうはもっと重要だと持ち出すべし。
183	点検	問いかけ	しかし反論しなければならない、どんな点に対して反論しようか。
189	点検	検証	“肝心な部分”。なら今日は6月21日、東山公園へ遠足に行った、で、先生と一緒にいった、で動物を見た、そしていろんな花を見た、チューリップだった、長さ3センチで幅2センチ。
190	評価	感想	つまらないなあ。

Dは大意把握したうえで、目標を再確認するために課題に戻って、「一分間の報告。テーマはいい作文とは(61)」と【目標設定】をしている。その後、その目標にしたがって、「作者が言いたいのは、最後のこの2つの段。そして、19と30の2行(63)」と関係ありそうな文章の内容に【焦点化】をしている。それから、「前のこの例は見なくていい。前の3行を切ってしまうおう。これは、簡単な説明、要らない(64)」と【計画立案】をしている。このように伝達目標においては【目標設定→焦点化→計画立案】という行動の連鎖を繰り返し、作文の内容を絞り込んでいることがわかる。

一方、Hは「文章を読んで、文章のどんな内容に注意するか(176)」と課題を点検

してから、「だから、私はこの文章を読むなら、美しさのほうが重要だと思う。(177)」と【目標設定】をし、段落2の事実と論理の箇所に【焦点化】し、「だから私は国語能力を磨くなら、美しさのほうはもっと重要だと持ち出すべし(182)」と【計画立案】をしている。このように【焦点化→計画立案】という行動連鎖を繰り返し、計画した主張の妥当性を【検証】し「つまらないなあ(190)」と【評価】している。その過程では作者の主張だけではなく、その論拠の妥当性も検討している。その上で「作者に反論するなら、“正しさ”はむしろ大切だけど、感受性ももっと大切だと思います。もっと大切だと思います。」と【計画立案】をしている。

以上のように「伝達目標」では、「伝達」という前提があるため、重要な箇所の要点を把握しようとし、【要約】という行動が観察される。そして、理解したものを「発表」するため、伝達という【目標設定】、抜粋のための【焦点化】、抜粋した内容を引用する【計画立案】という行動の連鎖が観察される。一方、「批判目標」では批判するために作者の主張を適切に把握しなければならないため、作者の主張を検討しその合理性を問いながら読んでいく。そのため「伝達目標」のように、作者の主張だけではなく、論拠にも注目している。そして、批判という【目標設定】、批判するための【焦点化】、批判相手の【検証】、【感想】、自分の主張を述べる【計画立案】という行動連鎖が見られる。以上の結果から、「伝達目標」のように作者の意見を受け入れて、それをただまとめるという形ではなく、それを検証したうえで、読んだ内容を踏まえて自分の意見を関連付ける内省的な行動が観察される。

#### 4. 3. 読解後

事後インタビューでこれから同じ目標が与えられた場合どう読むかを聞いた。Dは、今日の課題を「知らない人に教える」と理解し、文章の大意を読み取るという課題はいつもの読み方であると評価している。今後も「伝達目標」であるなら、今日と同じ読み方で読むだろうと述べている。一方、Hは、いつもの自分なら、「なるほどなるほど」と文章を受け止めながら読んでいて批判的には読まないが「今日は批判するつもりで読んだ」と述べ、もし、今後「批判目標」を与えられたなら今日と同様の読み方をするだろうと述べている。以上、2人とも目標を意識して、しかも、自分は目標に沿って読んでいくと評価している。

#### 5. おわりに

本研究の結果は、批判的な読みの過程では、モニタリングが多く行われ、知識の欠陥や文章の矛盾の発見等付加的な処理が行われ、文章の正しさを考えながら読む、という大河内(2001)の知見と同様の結果が示された。一方、先行研究では、伝達的な読みは文章の組み立てやつながりを考えて読み個々の単語の意味に注目する(大河内2001)、相手の理解を想定することがメタ認知的な働きを促進し、自らの理解と表現

とのズレを調整することで、より深い理解へとたどり着く（柏崎 2010、古本 2006）ことが示唆されているが、本研究では「伝達目標」は、課題を遂行するために、筆者の主張やそれに関連する内容には注意を払い、それらをどのようにまとめればいいのかという意識を促進するが、特に相手の理解を想定するメタ認知コントロールの促進は読解過程では観察されなかった。そして、日本語上級学習者の 2 人ともタイトルが示した文章の構造を利用して、文章の展開を予測したり、重要度を判断したりしていることが示された。しかし、重要である箇所に対する行動には、目標による影響の差が観察される。「伝達目標」では、作者の主張の把握に焦点を当てタイトル以外のキーワードなどを検証するという行動が観察されなかったが、「批判目標」では、反論するために、主張と論拠を注意深く検証しキーワードにも注意する行動が促進されることが示された。

今回は「目標」による 2 名の上級学習者の行動連鎖の動的なプロセスの差を示した。もちろん 2 名の結果から上級学習者の読解過程の一般化を導くことはできない。今後は、他の上級学習者でも同様の結果が示されるかどうかを継続的に検証していくとともに、言語能力で制限を受ける中級日本語学習者でも目標の差が読解過程に影響を与えるかなど、さらなる検証を行う必要がある。

## 注

- 1) 帯 2 (obi-2.x) <<http://kotoba.nuce.nagoya-u.ac.jp>> (2012年 4 月)
- 2) リーディングチュウ太:<<http://language.tiu.ac.jp>> (2012年 4 月)
- 3) 過去の問題集から 1 級、2 級、3 級の中篇程度の文章から各 1 つずつ、計 14 問の問題を抜粋したものである。制限時間 20 分間である。

## 参考文献

- (1) 稲垣佳世子・鈴木広昭・亀田達也 (2002) 「認知過程を研究するとは」『認知過程研究: 知識の獲得とその利用』放送大学教育振興会、9-17.
- (2) 内田伸子 (1982) 「文章理解と知識」『認知心理学講座 3 推論と理解』東京大出版会、158-175.
- (3) 大河内祐子 (2001) 「読みの目標が疑問生成に与える影響」『読書科学』45号、127-134.
- (4) 柏崎秀子 (2010) 「文章の理解・産出の認知過程を踏まえた教育へ: 伝達目的での読解と作文の実験とともに」『日本語教育』146号、34-48.
- (5) 三宮真智子 (2008) 『メタ認知: 学習力を支える高次認知機能』北大路書房
- (6) 白石知代 (1999) 「日本語記事文の読解における再話の効果: 再話プロトコルの観察を通して」『日本語教育』101号、11-20.
- (7) 古本裕美 (2006) 「読解目的と作動記憶容量が文章理解に及ぼす影響」『広島大学

大学院教育学研究科紀要』第二部55号、275-284.

## 謝辞

本論文の作成にあたり、終始多くのご支援と適切な助言を賜りました衣川 隆生先生に心より感謝申し上げます。